読売歌壇

小池　光　選

「この家に金品無し」と泥棒へ見せる張り紙して旅に出る　安中市　中山　恵子

【評】最近の泥棒は凶悪、残忍でただただ恐ろしい。この張り紙が有効かどうかは知らないが、しゃれたエスプリがある。大きくこう張り出して、心おきなく旅に出るのだ。

おさな日に父と摘みたるれんげ草走る電車に手を振りながら　宇治市　上原　恭子

【評】こどものころの思い出。春の花を父と摘んで、電車が来れば手を振った。最近のこどもは電車に手を振らない。手を振っても振り返してくれない。みんなスマホに夢中で。

ビル見上げ階を数える癖のありタワービルならもう手に負えぬ　福生市　二瓶　利明

【評】この癖はわたしにもあるので、作者の気持ちはよくわかる。四十階、五十階のタワーマンション、ただただ見上げるばかり。

いづこより来たりしものか車庫隅に住みつきし猫をシャコと名付けつ　鹿嶋市　加津牟根夫

山羊の乳で育てば山羊の顔になるざれ言信じ泣きし日のあり　群馬県　真庭　義夫

紅白の花桃の咲く家の前　売物件の札の立ちをり　藤枝市　北泊あけみ

花を浴び歩む遍路に尋ぬれば笑みて答へぬ太山寺までと　松山市　宇和上　正

冷凍室に冷凍食品われ思いギッシリ詰めて妻入院す　東京都　成田　周次

亡き犬にストックの花捧げたり寒かったろうみぞれ降る小屋　東京都　榎本　セツ

拾円で次の駅まで汽車に乗りれんげ畑をたくさん見たね　福山市　宇田　雍子

栗木　京子　選

わかき日の旅の轍の消えそうで捨てられないままの時刻表　鹿児島市　白沢　友実

【評】今はアプリに頼りがちだが、かつては時刻表が旅の必需品であった。駅名や数字の並ぶ時刻表には自分の足跡やレールの光も残っているようだ。「轍」が言い得ている。

春がすみ白サギ七羽供につれ気づかいながら田をおこしゆく　出雲市　安食　育子

【評】待ちわびた春。田起こしが始まる。白サギが七羽も田にやって来たところがじつに楽しそうである。白サギに気を遣いながら作業をする光景がうるわしく目に浮かぶ。

花追って君と訪ねた飛鳥山いま雑踏に姿を探す　東京都　熊村　剛幸

【評】飛鳥山に行った「君」とは今は疎遠になってしまったのだろうか。初句の「花追って」と結句の「姿を探す」が響き合う。

先を読むAI時代だったなら昭和の俺は頑張らなかった　八王子市　間渕　昭次

焼き場より戻る山路に花は散り母のぬくもり膝に抱き居り　神奈川県　小野　正明

ロンドンのタクシーのガラスの天井から空見れば月と金星の輝く　東京都　青山　繁

安眠を求め枕を集めたが二つ折りした座布団が良し　横浜市　杉本　恭子

国策にのりて杉苗植えし日よ木は売れずして山の流れる　福知山市　阪梨　義春

雨風に落ちた花々湯に浮かべ赤き椿のいのち愛しむ　熊本市　坂梨　三枝

寝たきりの祖母は天眼鏡で新聞を読みて世界を知らんと努めき　新居浜市　矢野　浩子

俳　万智　選

抜け殻は風専用の着ぐるみで夏のフェンスにしがみついてる　宇部市　常田　瑛子

【評】蟬かな、Tシャツかな……なんの抜け殻だろうと考えながら、なんの抜け殻であっても、それは「風専用の着ぐるみ」なんだと気づく。素敵な発見だ。風とともに生きている感じの結句も、印象的だ。

鱗粉のごとき黄砂をまぶされて僕の車は羽ばたけそうだ　生駒市　高橋　裕樹

【評】なかなか憂鬱な上の句だが、鱗粉の比喩を、それこそ蝶つがいにして展開させた。意表をつく前向きな下の句が、いい。

愛してる人の愛している人が僕というとんでもない春が来た　福岡市　椛島　由佳

【評】つまり相思相愛ということなのだが、慌てっぷりがユニーク。状況をかみしめるように、丁寧に確認しているところが微笑ましい。

車内では私も有袋類になるリュックサックを前に抱えて　東京都　富見井高志

脱ぎっ放しをみみんちょかんちょと言っていたおふくろの言葉出所不明　白井市　毘舎利道弘

回覧板つぎからつぎへ掛けられてうなじのような春のドアノブ　加古川市　石村　まい

戻り来る手紙のように別れとは知らずに糸が切れていること　札幌市　住吉和歌子

この町にエールを送りくるるごと山は桜のポンポン掲ぐ　三原市　天崎　千寿

スニーカーの紐をぎゅぎゅっと　空色は空の色とはすこし違って　雲南市　熱田　俊月

好きですと嘘をつかせた雪がいま溶けてしまえばただの水です　所沢市　里見　脩一

黒瀬　珂瀾　選

柿の木の新芽のひかる雨あがり冬の孤独を柿はぬけたり　豊橋市　坂部　さち

【評】ようやっと冬の寒さを耐え抜いて、春を迎えた柿の木。その様子は、孤独に耐える人生の比喩でもあるようです。春を喜ぶ作者の心と、一樹の命が重なり合う一首。

ため息と共に五歳は「つかれたよ。子どものあいて」と三歳を指す　東村山市　すだちひな

【評】一人前の口を利くおさなご。ほほ笑ましいですね。こうして他者を知ってゆくことで、子どもは自我を形成してゆくのでしょう。

スサノオが娶りし姫の名の酒を寝酒に酌みて十年が経つ　鳥取県　表　いさお

【評】米子の地酒「稲田姫」でしょう。遠い神話と歴史にちなんだ、地元の酒を愛し続けてはや十年。静かに酒を酌む作者の姿に、郷土への思いが透けて見えるようです。

ぼんぼりのやうなる花の三極の紙漉村に遅き春はも　尾張旭市　小野　薫

立ち尽くす青鷺に訊く今買った麻の帽子は似合ってますか　京都市　根来美知代

五十年前この観覧車にきみと乗り一周もうじき終えるかなしさ　静岡市　柴田　和彦

術後四年結婚指輪が抜けるほど平たく薄くなった君の手　名古屋市　柴田　優音

遊びつかれ昼寝の子らに添い寝してまあるい父子のつくる陽だまり　フランス　小仲　翠太

小作する田のげんげ草満開になればゆったり牛追いし祖父　佐世保市　近藤　福代

目が合って恋して泣いてミュージカル俺の人生これは無いなあ　筑西市　積善　康男

次回は13日(火)掲載予定

◇投稿規定◇　はがき1枚に未発表の1作品。住所、氏名（ふりがな）、電話番号を明記。◇他の媒体、選者への二重投稿は厳禁です。〒103・8601、にほんばし蔵前郵便局留、読売歌（俳）壇、○○先生（希望選者名）係または読売新聞オンラインから　右の影絵はちまき